

漢方製剤の知識

(XVII)

小建中湯①処方解説

北里研究所東洋医学総合研究所漢方診療部
 医長 渡 辺 賢 治

小建中湯は日常診療で非常によく用いられる処方である。特に小児科領域では頻用されるが、治療効果もよく、患者から感謝される処方の一つと思われる。今回は処方解説の第1回目ということで、原典から始めたい。原典は『傷寒論』、『金匱要略』である。『傷寒論』太陽病編に「傷寒陽脈瀼、陰脈弦なるは、法当に腹中急痛すべし。先ず小建中湯を与え、差えざるものは小柴胡湯を与える。」、また太陽病編の他の条文には「傷寒二三日、心中悸して煩するものは小建中湯之を主る。」とある。『金匱要略』血痺虚劳病には「虚劳、裏急、悸、衄、腹中痛、夢に失精し、四肢痠疼、手足煩熱、咽乾口燥する者は小建中湯之を主る。」とあり、また黄疸病編には「男子黄、小便自利、当に虚劳の小建中湯を與うべし。」とあり、婦人雜病には「婦人腹中痛むは小建中湯之を主る。」とある。

処方の構成であるが、ケイシ(桂枝) 4g、シャクヤク(芍薬) 6g、タイソウ(大棗) 4g、カンゾウ(甘草) 2g、ショウキョウ(生姜) 0.5g、コウイ(膠飴) 20gからなる。要するに、桂枝加芍薬湯にコウイが含まれたものと考えられる。コウイとはコウペイ(粳米)、すなわちうるち米に小麦の種子を加えて、バクガ(麦芽)で糖化させたものを言い、『古方薬議』によると、「虚劳を補い、気力を益し、痰を消し、咳を止め、咽を潤す。」とある。体力や気力を補う作用があり、新陳代謝を盛んにする薬である。コウイという薬は面白い作用があり、一般に小建中湯は下痢しやすい人に用いるが、コウイ自体は軽い緩下作用があり、例えば手術後のイレウスの患者で、便秘の悪い人にコウイを増量すると、便秘がよくなることもある。

使用目標であるが、小建中湯を用いる第一の目標は全身の疲労状態、精力の虚劳である。桂枝加芍薬湯に補益の効を持つコウイを加えるわけであ

るから、太陰病に用いる桂枝加芍薬湯証よりさらに一段と虚し、急迫症状の強いものに用いる。桂枝加芍薬湯や小建中湯の腹証には腹直筋が腹表に浅く拘攣しているものが多いのだが、必ずしもこれにこだわる必要はない。腹直筋の拘攣がなくて、ガスのためにお腹が張っている時は小柴胡湯の腹証に似ている時もある。桂枝加芍薬湯は虫垂炎などの急性疾患に用いられることもあるが、小建中湯は慢性の腹膜炎にしばしば用いられる。乳児の腹痛、殊に夜泣きの癖のあるものには小建中湯の証が多い。特に小児科領域で用いる機会が多いのだが、腹痛、下痢などのお腹の弱い子にはまず小建中湯を与えてみる。比較的小建中湯の適応となる子は過緊張の子供が多く、腹診をするとくすぐったがってなかなかお腹の診察ができないといった子供も多く見られる。

その他の目標としては、のぼせる、鼻血を出しやす、足の筋肉などが痛む。例えば夜中に「お母さん足を揉んで」と訴える子供や、唇が乾燥して荒れやすい、ササクレができやすいなども目標となる。また甘いものを好む傾向がある。このような子供に使いやすいのはコウイが入っていて甘くて飲みやすいという理由もある。エキスで出す場合、コウイを含む処方は一回量が多くなってしまいが、量が多くて飲みにくい場合はお湯に溶かして服用すればおいしいと子供に喜ばれる。しかし、たまに甘くて飲めないという子供もいて、かえって荊芥連翹湯や柴胡清肝湯がおいしいという子供もいる。

もちろん大人でも応用範囲の広い薬である。すでに述べたような虚弱、特に胃腸虚弱の体質を大人になるまで引きずっている人や、下痢便秘交代型の過敏性腸症候群で過緊張型の人などによく用いる。大抵は気が張っていて、過緊張が続くため

に疲れてしまうといったタイプの人が多いようである。逆に弛緩型の疲れには補中益気湯が適用となる。なお、大人でも子供でもシナモンの味を嫌う人には適さない。

このように小建中湯は応用範囲の広い薬であるが、もう一度適応症の整理をすると、子供には虚弱小児のカゼで腹痛を伴うもの、虚弱児の体質改善、夜尿症など、大人ではヘルニア、過敏性腸症候群、気管支喘息、潰瘍性大腸炎、高齢者の腹痛、手術後のイレウスなどである。アトピー性皮膚炎でも用いられるが、この場合には小建中湯にオウギ(黄耆)を加えた黄耆建中湯を用いることが多い。黄耆建中湯は「諸々の不足」を補うというように、種々の慢性消耗性疾患に用いる。皮膚に艶がなく萎黄色でカサカサしているか、逆に寝汗などかきやすくジクジクしているようなタイプに用いる。典型的な漢方所見であるが、腹診で腹直筋の攣急が目標となる。しかし、必ずしもこだわる必要はない。

症例を示す。1例目は虚弱な子供である。症例は5才の男児で、色白く体格はやや太り気味だが、よくカゼを引くとのことである。そしてカゼを引くと必ず扁桃腺を腫らし、高熱を発する。過去に何回かカゼを引いた時、喘鳴を伴い近医にて喘息ないし喘息性気管支炎と言われたことがある。診察所見では腹直筋の攣急はハッキリしないが、お腹をしばしば痛がり、時に下痢をするとのことである。口唇の荒れもあり、小建中湯を投与した。経過は順調で何よりも薬がおいしいと飲んでくれる。服用を続けているうちに腹痛の頻度が減り、徐々にカゼを引く回数も減ってきたとのことである。小児では腹証から鑑別するのは難しいが、この例の場合はお腹が弱いことがヒントになった症例である。

2例目は33才の男性で、気管支喘息により来院した。幼児期より喘息があり、中学生以降軽快していたが、社会人になり生活が不規則になって睡眠不足などストレスがたまるようになり、気管支喘息の発作を起こすようになった。気管支喘息の発作を頻回に繰り返す場合には麻杏甘石湯に代表されるような麻黄剤が考えられるが、今回の場合

テオドールでコントロールができていたため、本治療法として漢方薬による体質改善を目的とした。問診では平素より排便が1日2、3回あり、ストレスがたまるかと下痢をするとのことであった。この患者は腹診をするとくすぐったがり、腹直筋が強く緊張してしまい十分な腹診ができない患者であった。このような場合、大抵は虚証である。この患者の場合も体格はよいのだが、子供の頃の虚弱な体質を引きずっていると考えられ、小建中湯を投与した。すると、下痢症状が改善され排便回数が1日1回、多くても2回になり患者に喜ばれた。4ヵ月ほどで体力もついてきたような気がするとのこと、テオドールを中止し現在経過観察中である。このように成人で一見体力がありそうでも、子供の頃からの虚弱な体質を引きずっているような患者には小建中湯がしばしば投与される。

3例目は56才の女性で、34才の時に卵巣腫瘍の手術を行いしばらくの間体調はよくなったのだが、50才頃よりしばしば腹痛を伴い、その後イレウス症状により入退院を繰り返していた。この患者は内科から紹介されたのであるが、漢方受診前1年間はイレウスのため5回入院しており、退院しても1、2ヵ月で病院に戻ってしまうとのことであった。この患者は身長154cm、体重40kgと痩せている女性であった。最初に当帰四逆加呉茱萸生姜湯を投与したところ、腹痛が一向に軽減しなかったため中建中湯を投与した。そうしたところ、口中のびりびり感のため服用できないとのことであった。これは中建中湯に含まれているサンショウ(山椒)のためで、大建中湯もサンショウを含むため服用できないと訴える患者がいる。そこで小建中湯を投与したところ、本剤が一番飲みやすくてよいとのことであった。その後さらに便秘をつけるために、マシニン(麻子仁)を加えて治療を続けたところ、現在のところまだ腹痛は時々あるが、1年半は入院していない。このように術後イレウスで便秘傾向のものにも有効で、小建中湯のシャクヤク、カンゾウが筋の緊張を緩め腹痛を除く作用があるものと考えられた。

以上で小建中湯の処方解説を終わる。

(日本短波放送 7月22日)

三黄瀉心湯①処方解説

北里研究所東洋医学総合研究所
漢方診療部医長 渡 辺 賢 治

瀉心湯と名の付く処方には三黄瀉心湯の他に半夏瀉心湯、甘草瀉心湯、生姜瀉心湯、附子瀉心湯などがある。瀉心とは心の苦痛を除く意味であり、心の意味には二つある。一つは形態としての心、瀉心湯類の目標となる心下痞というのは心臓の位置している近傍、すなわち心下部のみぞおちあたりの痞えた感じを指す。もう一つは機能の上での心、つまりところを指し、瀉心湯のもう一つの目標である心気不足というのは不安、不眠など一連の精神状態を指している。瀉心湯の処方がすべてオウレン(黄連)、オウゴン(黄芩)の苦い味を持ったものが主となっているのは、五行説では苦い味は心を養うことより来ている。三黄瀉心湯は非常にシンプルな処方である。ただ漢方ではシンプルな薬ほど効き味が鋭いと言われている。日常診療でもここぞという時に威力を発揮するので、ぜひ試してみたい薬の一つである。ただしこれから述べるように、三黄瀉心湯はいろいろ議論の多い処方である。その事も含めて述べる。

原典は『傷寒論』、『金匱要略』である。『傷寒論』では大黄黄連瀉心湯という名で出てくる。条文は「太陽病、醫汗を發し、遂に發熱惡寒し、因って復た之を下し、心下痞し、之を按じて瀉、その脈浮の者は大黄黄連瀉心湯之を主る」。ここで「心下痞」という言葉が出てきた。これはみぞおちあたりの痞えた感じを指す。その次に「之を按じて瀉」という言葉が出てきた。日本漢方と中国漢方の違いは腹診にあるとよく言われている。日本漢方でいつから腹診が始まったかということに関しては大塚敬節先生に『腹診考』という論文があり、それに詳しく述べられている。ただ『傷寒論』の後漢の時代、すでに中国では腹診を行っていたことが「之を按じて瀉」という文章から読みとれる。その後中国では儒教の影響で腹診が廃れてしまっ

たようである。

次に『金匱要略』の条文であるが、「心気不足、吐血衄血するは瀉心湯之を主る」とある。ここに「心気不足」という言葉が出てきた。また『金匱要略』では瀉心湯という名前が出てくる。このように名前も異なり、また飲み方も『傷寒論』では沸騰した湯にしばらく生薬を浸して、滓を除いて頓服するという振り出し法が指示されているが『金匱要略』では普通の煎じ方になっている。さらに複雑なことは、『傷寒論』では大元の原本が残っていないためにいくつかの異本があるが、宋本、成本などではこの大黄黄連瀉心湯というのは大黄、黄連二味から構成されていて、黄芩が抜けている。しかし瀉心湯類を一覧してみると、黄連、黄芩が含まれていることが特徴であり、多くの解説書が『傷寒論』の大黄黄連瀉心湯と『金匱要略』の瀉心湯は煎じ方が違うにしても処方内容は同じであると考えている。

三黄瀉心湯はその俗称である。三つの黄のつく生薬、すなわち大黄、黄連、黄芩から成ることである。オウレンはベルペリンが主であるが、消炎作用を有する苦味健胃薬で、血圧降下作用、鎮静作用、高コレステロール改善作用などがある。オウゴンはバイカリンなどのフラボン誘導体が主成分で解熱作用を持つ。ダイオウはセンノシドに瀉下作用があることはよく知られているが、アントラキノン類には消炎作用があり、またRGタンニンは抗精神作用を有する。

煎じ方であるが、いわゆる振り出し法にする場合は熱湯100mLを加え、1～3分ほど浸してから、滓を去って頓服する。今でも普通に煎じる場合と振り出しにする場合と二通りある。

次に主要目標について述べる。

①先ず顔面が赤ら顔であること。これはポーッと

した桜色ということではなくて、はっきりした赤ら顔を指す。ポーッと桜色といえば苓桂味甘湯などケイシ(桂枝)の入った処方などを考える。黄連解毒湯などのオウレンの入った処方は、どちらかと言えば黒みを帯びたはっきりとした赤い顔が目標となる。

- ②気分がイライラして落ち着きがない、短気である。或いは小さいことに固執する、或いは大言壮語して言動に確実性がないなどが目標になる。
- ③胸中に熱感を訴える、これは時として胸焼けとして現れることがある。それが上に出てくると口内炎となり、或いは動悸となって時に胸痛になることもある。
- ④出血。この出血というのは鮮血が出て貧血がないことが目標である。出血していても手足の冷たい感じはなく、むしろ煩熱を覚えることがある。
- ⑤時に不眠、頭重、めまい、肩凝りがある。これらはないことも多いが、問診では必ず聞く必要がある。
- ⑥便秘。便秘の傾向の人は多く、また1日1回あったと言っても便通がうまく出ないとか、量が少ないということを言う。もし三黄瀉心湯を用いて下痢がひどく出るようであれば、これは三黄瀉心湯の証ではない。
- ⑦心下痞を認める。これはみぞおちの痞え感である。これが半夏瀉心湯になると心下痞硬と言ひ、自覚的痞え感だけでなく腹診上でも抵抗を認める。

こうしたことを目標として次のような疾患に応用される。

- ①まず炎症性疾患に対し消炎効果を期待して、結膜炎、虹彩炎など眼科領域の炎症、口内炎、舌炎など。
- ②鎮静作用を期待して、精神分裂病、躁鬱病、神経症など。また不眠、不安焦燥感、さらに高血圧、脳出血などにもしばしば応用される。
- ③止血作用と期待して、衄血、下血、咯血、吐血、また子宮出血などにも使われることがある。こうした場合には固まった血ではなく鮮血が出るということを目標にする。また貧血症状が強くない、あまり虚していないことが目標になる。特に衄血である鼻出血に対してはよく用いられ、即効性があるのでぜひ試していただきたい。このような出血性の疾患に用いる場合には熱を冷ます意味も含めて、冷たく飲む冷服を指示する。そうすると止血効果も高まる。
- ④健胃整腸作用を期待して、常習便秘とか二日酔いなどにも用いる。二日酔いに対しては黄連解毒湯がよく使われるが、三黄瀉心湯も便秘傾向がある場合には二日酔いによく効くので試していただきたい。

このように三黄瀉心湯は非常に単純な構成であるが、応用範囲が非常に広く日常診療でもいろいろな局面で用いる場面が多い処方であり、ぜひ試していただきたい。以上三黄瀉心湯の処方解説を述べた。

(日本短波放送 2月17日)

